

# リアル韓国生活談話

ミレスタッフ松本

\*リアル韓国生活談話は、ミレ韓国語学院スタッフブログに不定期連載されていたものを1つのファイルにまとめたものです。

## Vol.1

皆さん、こんにちは。松本です☆

今日は10年ぐらい韓国で暮らしていた時のエピソードについてお話ししたいと思います。

といっても、私が韓国にいたのは9年前。

移り変わりの早い韓国は大きく変化しました。

私がいた頃は地下鉄でお爺さんがお年寄りに席を譲らない学生を見て、無言でいきなり叩くのを目撃したこともありました。

もちろんその学生は文句一つ言いませんでした。

今では学生が同じ状況でイヤホンも着けず、ワンセグテレビを見ているにも注意する大人を見ることはほぼありません。

最近の子は何をするか分からないからというのが理由だそうです。

だから子供達も善悪の区別がよりつきにくくなり、  
彼らの行動が酷くなる。

全く日本の様ですただそんな今の韓国にも昔と  
変わらない場所があります。

それは市場です。

昔も今も人々は言いたいことを言いながら、  
忙しく動いています。

私は韓国に住んでいた頃、市場の中にある  
花屋さんの前でどの観葉植物を買うか  
悩んでいました。

すると私のすぐ隣で私の買う植木について  
真剣に考えてくれるおばさんがいました。

これは室内ではすぐ枯れるとか、  
育て方にコツがいるとか言いながら  
そのうち私の買うものの事でああだ、  
こうだ言いながらいつしか人が  
人を巻き込んで花屋の前は人だかりに  
なっていました。

私はその時韓国の人々の情に感動させられました。

しかしそれだけではありませんでした。

お金を払う時に分かったのですが、  
一番最初に私の買う物を一緒に悩んでくれた  
あのおばさんは店主ではなく、  
ただの通りすがりの人だったのです。

他人がまるで自分の事のように  
一緒に悩んでくれる今も市場に行くと、  
あの時の様な暖かい気持ちになることが  
多々あります。

人の情に触れることのできる市場、  
皆さんもぜひ行って見て下さい☆

## Vol.2

안녕하세요. 松本です☆

今日も第2弾と題して、私の9年間の  
韓国生活についてお話したいと思います。

今日は韓日間の恋愛についてです。

私の主人は韓国人です。

つまり私は国際結婚をしたわけですが、  
出会いは私が韓国の大学に留学中にありました。

その時、私は韓国語は話していましたが、  
韓国に来て1年足らず、  
韓国の様々なことが私にとっては新鮮でした。

その時私は20歳、主人は22歳でした。

私は人から紹介されて主人（その時はオッパと呼ぶ）  
と出会ったのですが、  
私は最初にオッパを見た時から、  
これといってピンとくるものは  
全く感じませんでした。

オッパはいつも無口でしたが、  
私にとってもよくしてくれました。

ただ無口なのに、強引なところがあり、  
私はいつも彼をみて、  
「何を考えてるんだろう？」  
とっていました。

最初にプレゼントをもらった時の事です。

オッパは相変わらず必要な言葉以外を

話しませんでした、常に微笑んでいました。

その日はやたら大きい荷物を持って

大学に訪ねてきました。

オッパが待っているという売店に行ってみると、

大きなくまのぬいぐるみと

小さな同じくまのぬいぐるみが

机に置かれていました。

私は大学の友人から韓国人の恋愛についての

話しをよく聞いていました。

そう、韓国での一般的な恋愛といえば、

男の子が女の子をそれはそれは

お姫様のように扱うのです。

問題なのは. . . 私は大阪で生まれ育ち、

年子の弟と共に男勝りに育ってきたので、

今更女の子として韓国式に扱われると、

なんともむずがゆい気持ちになるということです。

私は即座にそのくまのぬいぐるみが

どういう意味をもっているのかが分かりました。

案の定、オッパはにこにこしながら、

「これが僕で、これが君だよ」

と言いました。

私は言葉をなくし、必死でにこにこしました。

さらにオッパは私によく似合うであろう

ネックレスを買ってきたと言いました。

そして「つけてあげる」と言って、

着けてくれたそのネックレスを見て、

啞然なんと、金色のトンぼだったのです。

私はその時までトンぼがまさかネックレスに

なるとは考えもしませんが、

それをオッパが私に似合うと言って

買ってきた事の意味が分かりませんでした。

韓国ではカエルやかめのアクセサリーが

よく売られています。

私はオッパが心を込めて選んでくれた

そのプレゼントに対して

「ありがとう。オッパ」

というのが精一杯でした。

そしてオッパが家に帰る途中の駅で

彼は私に絶対に寄りたいところがあるといい、

花屋に行きました。

余り行きたくない私を気にも留めず、

オッパは私に私の年の数だけの

バラの花束を渡しました。

(だから嫌やったんや. . .)

私は駅までオッパを送り、寄宿舍に帰る帰路、

手にくまのぬいぐるみと大量のバラを持ち、

首にはとんぼのネックレスを着けて

放心状態のまま韓国をかみしめるのでした。

## Vol.3

안녕하세요. 松本です☆

今日は2弾に引き続き、私の経験を基に、

韓日間の恋愛についてお話しします。

前回は主人（その頃はオッパと呼ぶ）が

初めて私にプレゼントをくれた時のお話でした。

今回はオッパに対していまいち

ピンとこない状態から

私が彼を意識するようになった

きっかけとなるエピソードをお話しします。

忘れもしません。あの寒い日。

マイナス7度の中、外に立っていると

皮膚の感覚がなくなるような日でした。

その頃、オッパは私が住んでいる所から

なるべく近い所にいるため、

自分のお兄さんの住むスウォンに

仮住まいしていました。

彼は軍隊を卒業し、3ヶ月ほど経った頃でした。

その日は私とオッパはスウォン駅で

会う約束をしていましたが、

私は日にちを別の日と勘違いし、

それに気づいたのは約束の時間から

4、5時間経った後でした。

オッパも私もその頃は携帯を

持っていませんでしたし、

その日に限って私は外に出かけていたので

オッパと連絡の取りようがありませんでした。



またお兄さんに何度電話をかけても  
連絡が通じませんでした。

焦った私は電車で飛び乗り、  
スウォン駅に向かいました。

「ああ．．． 大変なことをしてしまった」

「怒ってるやろうな．．．」

「まさか、もう待ってないやろ．．．」

色々な考えが頭をグルグル回中、  
もう取り返しのつかない事に私は  
ぐちゃぐちゃ考える事しかできませんでした。

スウォン駅に着いた時は  
既に約束の時間から7時間が経過していました。

私はまずお兄さんに公衆電話から電話をかけ、  
やっと通じたお兄さんから衝撃的な話を聞いたのです。

「弟から電話がかかってきて、  
ずっと待ってるというから  
とりあえず家に戻るように話した。  
でもそれはできないって言うんだ。  
君が外国人だから自分が家に戻ってしまったら  
大変なことになるかもしれない。」

だから自分はここで待つ。

いくら説得してもそういうんだ。

駅を出た広場で今も待っているに違いない。」

「まさか. . . 」

「マイナス7度の中、7時間？」

「うそやろ. . . . 」

私は恐る恐る広場に出てみると、

一番真ん中のよく見える場所に

オッパは立っていました。

申し訳なさ過ぎて私は顔を上げることも

できないまま彼に近づいていきました。

オッパは目に見えるくらい

大きく震えていました。

「オッパ. . . . 」

私が恐る恐る彼を見ると、

オッパは満面の笑みを浮かべて一言。

「大丈夫だった？」

私は何かにぶち抜かれたような衝撃を受けました。

オッパはマイナス7度の中、  
7時間も待たせた私に怒ることも、  
理由を聞くこともなく、  
ただ私を心配してくれていたのです。

その時からです。

私の心は少しずつ動くようになりました。

私の苦手な韓国風の熱い、  
甘い言葉を何度聞かされても  
動揺することがなくなりました。

私の目の前で大音量、  
しかもアカペラで熱唱されても  
私は受け入れられるようになったのです！

こうして私は韓国の恋愛にはまっていくようになります。

## Vol.4

アンニョンハセヨ。松本です☆

前回に引き続き、  
私の実体験に基づいた韓国人と日本人の  
恋愛についてお話しします。

以前から見ていただいている方々は  
ご存知でしょうが、私は大阪生まれ、  
大阪育ち、男女の区別なく、  
父がおせち料理まで作るような環境で育ちました。

また私は年子の弟と共に男勝りに育った日本人です。

主人（その時オッパと呼ぶ）といえば  
韓国の田舎で育ち、兄弟が多く、  
身の回りのことはお母さんがお姉さんが  
してくれる環境で育ちました。

そう...韓国の特に田舎は台所に男が入ると  
だめだと教えられてきた、  
まるで昔の日本のような考えで生活が回っています。

私たちはまるで真逆の環境で育ちました。

なので性格もそれに沿って  
構築されてきたと思われます。

恋愛においての問題は私が男性のような  
心を持った女性だということです。

ある日、オッパが計画し、  
仁川のウォルミドーに行くことになりました。

彼は私が絶叫マシンが大好きだということを  
知っていたので、自分の大の苦手とする  
強烈なバイキング(船の乗り物)がある  
ウォルミドーに連れて行ってくれました。

それはラップを歌いながら速度を加速させ、  
安全装置といえばウエストあたりの  
布のような紐しかありませんでした。

そのラッパーの目的はそれに乗っている  
お客さん全員を泣かせることでした。

90度近い角度でどんどん加速されていく、  
その船は高所恐怖症で揺れるものが  
大の苦手な主人にとってまさに地獄でした。

逆に私はそのスリルに大喜びで  
終始げらげら笑っていたので、  
そのラッパーは私をみてさらに高度を上げるのです。

最終的に私に降参したラッパーが時間を超過した末、  
降りてくれました。

そしてふと横にいるオッパを見ると  
よろけてボロボロになっていました。

そしてオッパは急に遠くに走って行って、  
吐いていました。

私はそこまで嫌いな絶叫マシンに乗り、  
私を喜ばせようと必死に付き合ってくれた  
オッパにまた感動するのです。

少し休憩した後、私たちは近くの  
ゲームコーナーに行きました。

私は昔から勝負は勝つためにする  
という考えを持っていました。

それがデートだとか、可愛く見せようとか  
そんな思いは一切なく、ただモグラたたきやら、  
射的やら全てを勝つために挑みました。

今から考えるとあまりにも浅はかだったと思います。

軍隊を卒業しているオッパのプライドも  
ボロボロにしながら私は射的にまで  
オッパに勝ってその初デートは幕を閉じるのです。

## Vol.5

皆さん、お久しぶりです。松本です。

とうとう「韓国生活談話」も5回目となりました。

いつも見ていただいている方々に感謝です。

今回も韓日で国際結婚をした私の経験を基に  
韓日の恋愛についてお話したいと思います。

私が主人（その時のオッパ）と喧嘩した時の  
エピソードです。

オッパと私は韓国人、日本人なので外見は  
ほとんど変わりませんが、その中身は  
全く異なっていました。

お互いの常識はその国を基とした常識であり、  
お互い「人として．．．じゃないか」という  
基準が全く異なっていました。

だから一つ一つが  
喧嘩の原因になってしまうのです。

私たちはくたびれるほど喧嘩しました。

オッパは自分の生活の全てを私に合わせ、  
お金ができれば私に使い、  
そうやっていつも私によくしてくれました。

が、しかし．．．私の服装、髪型、

アクセサリーに至るまで注文をつけてくるのです。

最初にオッパはこう切り出しました。

オッパ「君はスカートがよく似合うね。

オッパといるときはいつもスカートをはいたらいいよ。

そうそう、髪もそのぐらいの丈がちょうどいいよ。

切らないようにね。」

私「……………」私は動揺しました。

ただ必死に笑顔をつくりましたが、

私の心の中ではこの言葉が繰り返されました。

(きもっ．．．！！)

気持ち悪いの意後になって知りました。

韓国ではそれが普通の事なんだという事を．．．

韓国では一般的に彼氏や彼女はお互いのために

とにかく尽くします。

それは相手を自分の家族、

いや自分の一部のように思っているからなのです。

だからオッパが私に放った言葉は

韓国ではおかしいことではないのです。



それが証拠に韓国では婚約者でもないのに  
彼氏が彼女の部屋の家賃を払ってあげ、  
彼女の語学学習のための塾代まで出しあげる。

払う彼氏も、払ってもらおう彼女も  
それを当たり前のように捉えている。

このようなケースがよくあります。

私たちは大きく喧嘩して以降次に会う時、  
一度こういうことがありました。

私がオッパの家に行く途中、  
遠目にオッパが家の前で100本のバラを  
抱えて私を待っていました。

私が韓国の女性なら、  
喧嘩した原因を忘れるほど感動して、  
オッパに飛びついていたのでしょうか。

ただ私は大阪人。

とてつもなく大きいバラの花束に  
埋もれたオッパを見て、とにかく腹が立ちました。

(喧嘩の原因もわかってないのに、

オッパはこの花束でそれをなかったことに  
しようとする。これからもずっとこういうことを  
繰り返すんだ。あほか！！)

私はもう色々なことが限界でした。

とっさに私はオッパの家とは反対側を向き、  
自分の寄宿舎に向かっていました。

オッパから数えきれないくらいくる電話を一切無視し、  
私は電車の中でひたすらプリングルスを食べるのでした。

## Vol.6

안녕하세요. 松本です。

いつものように韓国での私の経験を基に  
お話したいと思います。

今回は「お兄さんの奥さんの存在」  
と題してお話します。

この「お兄さんの奥さん」は  
私とは全く正反対の韓国人女性でした。

彼女は後の私の人生に痛手を与える存在となります。

「お兄さんの奥さん」は外見は

まるまるふくよかで、私よりも4つ年上。

愛嬌抜群で愛情表現は常にたっぷりされます。

彼女が義理の両親の前であっても関係なく

お兄さんに愛嬌をふりまいているその姿は

私のそれまでの人生では目にしたことがない光景でした。

私は彼女を見る度、

その外見と中身の差に絶句するようになります。

ある日、お兄さんのマンションに行った時のことです。

お兄さんの部屋は以前行ったときとは

まるで違っていて、明らかに女性の部屋に

なっていました。

そしてものすごくたくさんの金魚鉢のようなものが

きれいに並べてありました。

その中には数えきれないほど折り紙でつくった

小さい星がぎっしり詰まっていました。

そしてその正体は....

「お兄さんの奥さん」がお兄さんへの思いを

表した手作りのプレゼントだったのです。

韓国では彼女が彼氏へのプレゼントとして  
そのような手作りのプレゼントを渡したりします。

それが日本でいう手編みのマフラーに留まらず、  
時間と努力の結晶を彼氏に渡し、

「これが私の思いだよ」

という表現の仕方をするのです。

この思いの重さですが、  
例えば相手がそのプレゼントを渡した人のことを  
何とも思っていない場合、考えられないほど  
おぞましいプレゼントになってしまう  
恐れがあると私は思います。

ふくよかな「お兄さんの奥さん」が身をかがめて、  
ものすごく小さい折り紙をお兄さんを思いながら  
作り続けている姿が私の頭によぎりました。

<大量の★の数＝彼女の思い>

私は背中がぞっとしました。

このような「お兄さんの奥さん」は  
常に愛嬌の塊のような態度と言葉を放ちました。

その姿は私には確実にない一面でした。

決定的な事は彼女の存在により  
私の男気がさらにクローズアップされる  
羽目になったのです。

そして私はオッパ（今の主人）から  
耳を疑う言葉を聞くようになります！

「君もちょっとはお姉さんのようにはできないか？」

その瞬間、私の怒りは頂点に達するのです。

## Vol.7

안녕하세요. 松本です。

私の経験を基にした生活談話を  
お話したいと思います。

昨日に続き、「お兄さんの奥さん2」  
と題してお話します。

お兄さんの奥さんの存在は  
私とオッパ（今の主人）との関係に  
大きな影響を与えました。

ただ彼女は男性だけに愛嬌を持って  
接する人ではなく、

女性にもそのようにする人でした。

韓国の多くの女性はそのように

愛情表現が豊かなのです。

お兄さんの奥さんはその当時、

新婚だったのでそれがMaxな状態だったのでしょう。

私はお兄さんの奥さんから学びました。

女性は愛嬌が全てなんだということ！！

大人の女性が時と場所に関係なく、

いつも愛嬌たっぷり振りまく彼女の姿は正直、

私にはいまいち受け入れ難いものでした。

しかし大事なことは彼女の夫であるお兄さんは

いつも嬉しそうだったのです。

それどころか彼女の柔らかい言葉と

過度なボディタッチにより

お兄さんはいつも全て奥さんの

言いなりになっていました。

私は決意しました。

愛嬌たっぷりの可愛い女性になることを！

私の頭の中ではあのオッパの言葉が  
事ある度に繰り返されました。

「君もちょっとはお姉さんのようにできない？」

実際、彼女は外見は男性のようで、中身は女性。

私は外見は女性、中身は男性のようでした。

負けへんで！！！！

私は怒りは笑顔に変え、

徹底的にか弱い女性に変身しました。

そう、演技したのです。

最初は私の豹変ぶりにオッパはうろたえ、恐れました。

しかし時間が経てば経つほど

オッパは変わっていきました。

「心配することはない。全てオッパに任せたらいい」

そのようなことを言うようになりました。

これを機に2人に想像もしなかった

変化が起こりました。

あの頼りなかったオッパが男性らしくなり、

男勝りの私は自分に女性の要素があることに気づきました。

その当時、オッパが私によく言った言葉です。

「君が目の前にいてもずっと、もっと見ていたい」

「君を小さくしてオッパのポケットに入れて持ち歩きたい」

おばちゃんになった私は

あの時のオッパは何ともむずがゆい事を

あの顔で平気で言えたもんだとしみじみ思うのでした。

## Vol.8

안녕하세요. 松本です。

今日も私の経験を基にした韓日間の恋愛について

お話したいと思います。

オッパと私はどれをとっても全く正反対でした。

大学入学当初に出会い、

それから月日は5年経っていました。

その間私たちはお互い分かり合えない苦しさに

おかしくなりそうな時が幾度となくありました。



また当時のオッパはお金も仕事もありませんでした。

オッパは私との将来を見越して、

学歴の差ができるのを恐れ、

働いていた職場を辞めて大学に入り直しました。

貧乏で不安な未来、あるのはオッパの借金...

それに私たち2人の間には

価値観の違いという壁が高々とそびえ立っていました。

そんな時、私の大学で

長野県で白菜堀りのアルバイトを募集する

というポスターが貼ってありました。

それは1か月半で大金を手にし、

また住み込みなので日本語を学べるという

夢のようなバイトのように思われました。

しかし実際は毎年余りにも大変な仕事なので

それまで稼いだバイト代を放棄して

途中で韓国に戻る人たちが続出していました。

オッパはそれに参加すると言いました。

しかしその頃、

韓国人が日本に長期滞在するには

ビザが必要でした。

もちろん結婚して配偶者ビザが取得できれば

その問題は解決できます。

オッパは私にこう言いました。

「どうせ結婚するんだから今、

婚姻届を出してしまおう」

白菜堀り？婚姻届け？？結婚！！！私は嫌でした。

白菜堀りと私の結婚を重ねられる事も嫌でしたが、

その時、私たちは結婚するための

何の備えもありませんでした。

オッパは大学生、私は大学院生。

自分のことで精一杯なのに何が結婚だ！

オッパは無責任だ！！

現実の状況とオッパの話が噛み合わない...

でもオッパはやはり軍隊を卒業した韓国人です。

彼は何があっても意志を曲げません。

私は悩みました。

何一つとして私たちが結婚できる  
要素がありませんでした。

ただ一つ、確かなのは. . .

私は既に彼を家族として  
受け入れていたということでした。

それが証拠にオッパのいない私の人生は  
想像もできませんでした。

そしてオッパもまた私と同じでした。

出会ってから今に至るまで彼は私に  
「別れよう」と言ったことは一度もありません。

出会ってから6年後、私たちは婚姻届を出しました。

夏休みになり、オッパは白菜掘りに行き、  
私は彼に生活費を渡すため観光地で  
住み込みのアルバイトをしました。

オッパは白菜掘りの厳しさに耐え抜き、  
アルバイトを終えて私の家族に会いにきました。

閑空でオッパが出てくるのを待っていると、  
真っ黒になったオッパが手を振りながら  
満面の笑顔で出てきました。

そして何よりも驚いたのは  
一言も日本語が話せなかったオッパが  
私の両親と会話をしているということでした。

こうしてオッパは初めて私の実家に  
数日泊まることになります。

続きは今度. . .

## Vol.9

アンニョンハセヨ. 松本です。

今日も私の経験を基に  
韓日の恋愛についてお話しします。

韓国生活談話 8 に続きます。

オッパが長野県の白菜堀りのアルバイトを終えて、  
初めて私の実家に泊まりに来た時のことです。

私の両親も彼を迎えるために  
精一杯の準備をしてくれました。

彼は日本語が一言も話せませんでしたが、  
住み込みのアルバイトで鍛えられたせいか、

私の両親と日本語での会話が成り立っていました。

両親も私も本当に感心しました。

夕食の時間になり、

私の母はそれこそテーブルの脚が

折れてしまうほど沢山の料理を

準備してくれました。

韓国の田舎で育ったオッパはそれまで

見たこともないご馳走を前にただただ

空いた口が塞がらない状態でした。

それまでも私は彼の貧乏秘話を

たくさん聞いてきました。

お腹が空いた時は学校で水道水を飲んで

お腹を膨らませた等々、それはまるで

私の父の幼少期のような話ばかりが

出てくるので、私と2歳しか変わらない

オッパと父(戦後生まれ)の生活レベルが

合致し、私はオッパの話を聞く度、

まるで父の話を聞いているようでした。

その反面、私の家といえば

いつも母は食事に気を使い、

特にお客さんが来たわけでも  
いつも豪華でした。

なのでオッパが来た時は  
さらにスペシャルだったのでオッパはそれらを  
見て言葉をなくした訳です。

オッパは数えられないほどの  
エビフライを見ては「ふぁ～」と言い、  
霜降りのステーキを食べては  
「ひえ～」と言いました。

オッパはものすごい量を片っ端から  
全て食べ尽くしました。

私の家族はオッパの食べっぷりに驚きました。

そこまでは良かったんです！

その後も母は「デザート食べる？」  
とまたカロリー大のケーキを持ってきては  
オッパは「いただきます！」、  
「アイスクリームもあるけど、もう無理よね？」  
と言うと、「いただきます！！」  
そう言って絶対に断わりません。

父も母も弟もしまいには

「無理しなくていいよ」

「全部食べなくてもいいよ」

と言いました。

それから30分経った頃ぐらいでしょうか、

みんながテレビを見ながらくつろいでいるのを

よそにオッパはキッチンに置いてあった

盛ってある果物を見て、

「お母さん、これ食べていいですか」

と言いました母はもちろん

「うん、何でも食べていいからね」

と言いましたが、内心脅威を感じていたと言います。

翌朝、早くに目が覚めた私は

オッパがいない事に気が付きました。

私がキッチンに向かうと、

何やら暗闇でゴロゴロ動いているではありませんか！

私「オッパ？オッパ！！そこで何してるの？」

振り返ったオッパの口の周りは真っ白でした。

人数分買って置いてあった大福を

指でつまんではひょい、ひょいっと

全て食べてしまいました。

オッパ「これ、甘いな〜」

私「それ、いいんだけど、

人数分買ってあったやつなんだけど．．．」

オッパ「だってお母さんが全部食べていいって

言われたから．．．」

そうなんです！

韓国は沢山食べることが喜びであり、

礼儀でもあります。

また食事を準備した人も沢山食べる人を見て、

また喜びを感じます。

私の両親といえは．．．．．

脅威的に食べまくるオッパを見ては

「あの子、どんな風に育ってんのん？」

と言い、一番風呂に入った後、

お風呂の栓を抜いて

お湯を全部捨てたオッパをみては苦笑いして、

そうやって初めての私の実家での

お泊りは幕を閉じました。ジャン、ジャン！



# Vol.10

アンニョンハセヨ。松本です☆

今日も私の経験を基に

韓日の恋愛についてお話しします。

前はオッパが私の実家に

初めて来た時のお話しでした。

今回は逆に私が韓国のオッパのお家に

お邪魔した時の事をお話しします。

毎度お伝えしている通り、

オッパと私は韓国人と日本人の枠を超えて、

全てが真逆でした。

私はオッパのお家に行くということで、

それはそれは緊張していました。

アボニム(父)、オモニム(母)に

気に入られるだろうか？

失敗をしたらどうしよう．．．

そんな不安だらけのままお家に到着しました。

「ア、アンニョンハセヨ．．．」

強ばる顔を無理やり満面の笑顔に変えて

あいさつをすると、

アボニム(父) もオモニム(母) も

それはそれは喜んで迎えてくれました。

韓国の田舎の家．．．

現在はお家を改装してきれいになりましたが、

その頃トイレは外、お風呂場はなく、

トイレの横にちらっとシャワー機が

かけてあるだけで日本人の感覚では

不便極まりない環境でした。

しかしご両親や4人の兄弟といっしょにいと、

オッパは家族の愛情をたっぷり

受けて育ってきたのだな～と感じ、

微笑ましくなるのでしたって、食事の時間です。

「オモニム、お手伝いします．．．」

そうは言っても何をどうしていいのか分からない。

言われるままにせわしなく動いていると

あることに気づきました。

この家はいつでも女性しか動かない. . .

いつも男性陣はのらりくらりしていました。

訳わからん. . . .

(私の家では父が母より動いていることが多々あります)

「さあ、食べよう～」

そう言うオモニムという言葉で

男性陣が初めて動きだし、

一番最後に来られるアボニム（父）を待ちます。

アボニム（父）が来られると、

「食べよう」と言われ、皆が食べ始めるのです。

そして何より驚いたのがその食事の場は

それはそれは静かだということです。

山で採ってきた山菜や薬草らしきものが

並ぶ緑色と赤色（キムチいろいろ）のおかずを

テレビを見ながら食べるのです。

私はその沈黙について

耐えられなくなりました. . . . .

私「オモニム、これ、すごくおいしいですね！」

オモニ「そう．．． 沢山食べて」

私「これもおいしい、どうやって作るんですか？」

オモニ「．．．．」

私(^\_^;)

オモニ「いいから食べなさい(^\_^)」

私「！！！！」

私はどうしようもなく強ばる顔を伏せ、  
もくもくと緑色と赤色のおかずを食べるのです。

そして食事が終わるや否やあれだけの  
ご飯を食べたというのに、  
とてつもなく大きい梨やりんごなど  
大量を家族全員で食べました。

そうしているとまた誰かが栗を大量に  
持ってきて生のままの栗をナイフで  
起用に剥いては私の口に入れてきます。

「！！！！」

そう、韓国人は生の栗を好んで食べるのです！

そして家族全員やせ形なのに、  
食べる量は尋常じゃありません！

私は限界をとっくに超える量を食べてつくした後、  
アボニム（父）が私に  
「韓国の食べ物では何が好きか」  
と聞いてこられました。

私が「ヤンニョンチキンです」と答えると...

何がどうなったことか！！！！

アボニム（父）はすぐさまヤンニョンチキンの  
出前を頼まれるのでした。

ひええええっつ～！！！！

こうして私は胃を痛めつけるだけ痛めつけ、  
薬局に走って行っては薬を飲み飲み  
しながらシデク（夫の実家）での  
お泊りは幕を閉じるのでした。

## Vol.11

アンニョンハセヨ。 松本です。

今日も私の経験を基に

韓日の恋愛についてお話しします。

私は韓国での留學生活の延長上に

韓国人のオッパと結婚し、そのまま

韓国人の家族の一員になりました。

私はそれまでの留學生活中、

大学の寮で韓国人と共に暮らし、

韓国人の友人の中に溶け込んでいました。

なので韓国や韓国人についてある程度の事は

理解しているつもりでした。

ところが、その思い込みが間違っていたのです！！

留學生活と結婚生活は全く違っていました。

オッパと私はソウルのある地域に

部屋を借りて暮らすことにしました。

彼はその当時、エンジニアの研修期間中、

私は大学院で学びながら日本語講師をしていました。

お金のない私たちはなるべく

安い部屋を探していましたが、

外見はともかく、

中はとても清潔間のある良い物件を  
見つけることができ、とても喜んでいました。

ただ引っ越しに伴って色々な事を準備する中で  
意味ありげな言葉をよく耳にするようになりました。

「どうしてあんたたちみたいな人らが  
こんな所に引っ越してきたの？」

後で知ったのですが、  
そこは1年に3回も泥棒が入り、  
地域的にもとても殺伐とした所だったそうです。

何も知らない私たちはもうそこで暮らす以外  
方法はありませんでした。

そして私の戦いが始まったのです！

ある日の朝、私が学校に行こうとすると  
家の門が開きません。

閉じ込められてしまった私は  
何とか開けようと扉に体当たりし、  
飛び蹴りをし．．．

そうする内にやっと人一人通れる隙間ができました。

外に出てみると．．．．

なんとしたことでしょうか. . .

オッパが早朝外に出た時にはなかった

粗大ごみの山が私の家の前に

大量に積み上げられているではありませんか！

韓国でも粗大ごみはお金を払って捨てるものです。

その地域の心無い人が他人の家の前に

扉が開かないほどのごみを積み上げていったのです。

これは韓国がそうというわけではなく、

どこの国にもそのような人はいると思います。

しかしそのダイナミックさは

やはり日本にはなかなかないものではないかと

私個人的には感じました。

はっきりしていたことは

私たちは輝かしい新婚生活を

そのような事が頻繁に起こる地域に

自ら足を踏み入れてしまったということです。

そして私は日本語講師として

リッチな地域の某有名日本語学院で教えていましたので

毎日、毎日同じ韓国でもそれぞれの地域差にびっくり、



どっきりさせられる日々を過ごすのでした。

## Vol.12

안녕하세요. 松本です。

今日も私の韓国生活について

お話しします。

韓国での新婚生活は

とても楽しいものでした。

オッパは就職が決まらず、

半年間エンジニアになるための

教育を受けていました。

私は大学院関係や友人からの紹介で

日本語講師として充実した毎日を送っていました。

私はオッパに自分ができるだけの事をしました。

毎日片道1時間かけて研修所のある駅まで

オッパを迎えに行き、帰りに2人でトッポッキや

パピンス(韓国式かき氷)を食べたりしました。

それはまるでドラマの様でした。

2年くらい経ち、私達夫婦に子供ができました。

オッパは仕事もお金もありませんでしたが、

私は彼の人間性を尊敬していました。

それまで彼はいつでも自分より

私を優先してくれていました。

なので私は私たちに子供ができれば

彼はどれほど良い夫、父になってくれるだろうか...

考えただけでもワクワクしていました。

私は今でもあの時の事を鮮明に覚えています。

オッパ「ただいま。あーあ、犬飼いたいな~犬、飼おうか？」

私 「犬、飼わなくて良くなったよ」

オッパ 「ん？」

私 「赤ちゃんができたよ」

私は韓国ドラマのような

そんな一面を思い描いていました。

オッパ 「はあ...」

私 「えっ?! それだけ...?」

オッパ 「そう...」

私 「え？ 嬉しくないの??」

オッパ 「そんな事はないよ...」

韓国ドラマならこの時点で旦那から

ありがとうを連発され、

ハグされてくるくる回っているはずでした...

実際は. . . . .

私の頭の中がくるくる回っていました。

現実にはドラマのようにはいかない事を痛感しながら、

その頃ぐらいからオッパに対する

尊敬の念に影が差し始めるのでした。

## Vol.13

アンニョンハセヨ。松本です。

韓国生活談話ももう12回目になりました。

いつも見てくださっている方々に感謝です。

今回も続きをお話します私たちに

子供ができたと聞いたオッパの反応は

何ともいまいちなものでした。

オッパはエンジニアの研修を修了した後、  
サムソンに入社することに決まっていました。

なのでオッパのそのいまいちな反応は  
私にとっては理解しがたいものでした。

私はそれは「男の責任感からくる不安な気持ち」  
であると信じることにしました。

私のお腹がどんどん大きくなるにつれ、  
私はオッパと共に赤ちゃんを喜びで  
迎えてあげたい思いでオッパにお腹が動くこと、  
病院の健診結果など超音波写真を持って  
一生懸命話しました。

それでも彼の反応は薄いものでした。

つわりもひどく、  
どんどん辛くなっていく生活...

オッパのその薄い反応が親、兄弟のいない  
外国で暮らすことの寂しさに拍車をかけるのでした。

オッパの仕事はどんどん忙しくなり、  
朝6時ごろ家を出て、

いつも帰りは日付が変わって帰ってきました。

彼はいつもクタクタで食事をしながら眠りました。

だから私は毎日お弁当、おやつ、夜食を準備し、  
彼にそれを持たせました。

10か月を過ぎた頃だったでしょうか．．．

私に早産のけがあることが分かりました。

病院では絶対安静にすることを常に言われました。

初めての出産、一日中誰もいない部屋．．．

私はいつ生まれるか分からない赤ちゃんゆえ、  
毎晩が不安で、オッパが1分でも早く帰ってくる  
ことだけを願っていました。

それでオッパにはとにかく今は危ない状態だから  
なるべく早く帰ってきてほしいと言いつけたのです。

それでも彼はいつもと変わらず遅く帰ってきました。

私は毎日クタクタで返ってくる  
オッパにかける言葉を無くしました。

ある時、オッパの同僚が家に遊びにきました。

私はその人から初めて

オッパの仕事ぶりについての話を聞きました。

その時私は耳を疑うような話を聞いたのです！！

オッパの同僚はこう言いました。

「毎日、こいつは同じ職場の同僚から

いろんな頼みごとをされ、

それをするために毎日遅く帰ってるんですよ。

断ればいいものを、根が優しすぎるんです」

とそういうのです。

私は今日生まれるかも知れないと

ビクビク怯えながら、毎晩時計ばかりをみて

オッパの帰りを待っているというのに、

オッパは人助けをして家に遅く帰ってくる??

今はどっちが大事なんやー！！あほかー！！！！

私の怒りは天をも突き抜ける勢いでした。

## Vol.14

안녕하세요. 松本です。

今日も韓国生活談話と題して

前回の続きをお話しします。

外国で暮らしながら、

初めての出産を迎えようとする私に対して

オッパは余りにも思いやりのない態度で接しました。

そしてそんな私を心配して

母が日本から駆け付けたのです。

母はもちろん韓国語が話せず、

オッパは日本語が話せません。

何日か私たちと共に暮らすことになった母も、

またオッパもお互い居心地は良くなかったことでしょう。 . . . .

母は朝早く出勤し、

夜遅く帰ってくるオッパを理解していました。

ただ母は勤が鋭い人。

オッパの私に対する配慮の無さは

ほとんど顔を合わせる事のない

短い時間の中でも十分に伝わりました。

母はそんなオッパに苛立ちを隠せなくなり、

オッパはそんな義理の母に恐怖感を抱くのです。

多くの韓国人がそのような

愛想笑いができないオッパ。

私から見ればそれは露骨に母を避けていました。

そしてとうとう母は爆発してしまったのです！！

「チャンス君！私がここにいたらあかんの？！

それならはっきり言ってくれる？

私は娘の家にもおられへんの？

はっきり言ったらどうなん！！！」

大阪のおばちゃんが切れると...

おお、怖い.....

しかし母の言うことは何も間違っただけではありませんでした。

オッパはただただ下を向きましたが、

それから以降もそんな母を避けることを

止めませんでした。

きっと「たてまえ」のない韓国人は

心の向くままに動いてしまうのでしょう。

韓国人の良さがこの状況では

完全に裏目に出たというわけです。



私は早産のけがある、絶対安静の身でしたが、  
2人の間に挟まれて地獄にいる気分でした。

母には私は大丈夫だから  
とにかく日本に帰るようお願いします。

そして母は心配な娘を韓国に置いて、  
日本に帰国することにしました。

空港バスの停留所の前で母は私に涙しながら、  
「ほんまにごめんやで」  
と言いました。

そしてあんなに憎らしく思っていた  
義理の息子の手をぎゅっと握って

「お母さんが、ほんまにごめんやで。  
チャンス君、娘、頼んだよ」

と言いました。

私はそんな母の前に心配ばかりかける娘で  
しかないことが申し訳ありませんでした。

だからこそより笑顔で見送るのでした。

## Vol.15

안녕하세요.松本です。

前回の続きをお話します。

とうとう来る日が来ました！！

それはお昼頃...

浴室で洗濯物を手洗いしていたときの事です。

「あ～ しんどっ」

っと腰をあげ、

その洗濯物をベランダに干そうと移動したところ

私の通るところは全て水で濡れていました。

「ん？」

「なんじゃこりゃ？」

しばらく私は何のことが分からないまま

水がどこから出ているのか確認するため

部屋中をウロウロしました。

その瞬間...

「あっっっ！！！！これが破水？！！！」

私は驚き、うろたえ頭が真っ白になりました。

っと、とりあえずオッパ、オッパ...

そうして私はオッパに電話をしました。

彼は全く電話を取りません。

そして何度か電話をするとやっと繋がりました。

私はオッパに

「破水、破水したみたい。早く病院へ行かなきゃ」

と言いました。

オッパの仕事は家電の修理。

その時、彼は洗濯機をちょうど直しているところでした。

「破水？破水？んん？破水？」

彼は全く私の言う意味を理解していない様子でした。

そしてしまいには

「家の洗濯機が故障したの？」

と言ったのです。

洗濯機の事で頭がいっぱいだったオッパは

私が言う「破水」を洗濯機の「排水」と

勘違いしていました。

そんなこんなでやっと事の重大さに気づいた彼は

今から家に着くまで1時間はかかると思いました。

赤ちゃんが危ない！

私は電話を切り、

病院へ電話をしました。

京畿道にある国際病院で出産することになっていた私は

立地条件や産後の教育などを考えるなら

どうしてもそこで産みたかったのです。

病院側はすでに破水したなら赤ちゃんが

危険だから近くの病院へ行くように言われました。

私はオッパが家まで帰るまでの1時間

それに家から病院まで車で約1時間かかる事を考え、

混乱しました。

そしてオッパに再度電話をしたのです。

オッパはこう言いました。

「赤ちゃんが無事であることが大事だから...どうする？」

「もう、分からない。でもぜったいあそこで産みたい...」

「じゃあ、分かった。そうしよう。」

不思議なことにオッパのその言葉で決心がつき、

赤ちゃんは大丈夫だという確信が持てました。

そしてその日に限っていつも混んでいる道は全く混まず、

他の車は私たちの車を避けるように通りました。

私たちは考えられない速さで病院へ着きました。

途中、病院へ連絡を入れていたので

病院では待機してくれていました。

そして婦長さんが私に一言。

「こんな無謀な妊婦さんは初めて見たわ！！」

私は何の異常もないまま出産を迎えるのでした。

## Vol.16

안녕하세요.松本です。

皆さん、お元気でしょうか。

それでは今日も韓国生活談話と題して

お話ししたいと思います。

私は韓国の京畿道にある国際病院に

破水した状態で運ばれ、2時間の陣痛の末、

無事に元気な男の子を出産しました。

オッパは分娩室と一緒に入り、  
出産と一緒に迎えた訳ですが、  
まあ、その反応の薄いことと言ったら...

オッパは小さな目をパチパチさせながら

「ありがとう」

「ご苦労さん」

の一言も無いまま出産を終えました。

そう、韓国の田舎で生まれ育ったオッパは

反応がすこぶる薄いのです

注) 韓国の田舎育ちの全ての男性が反応が薄いわけではありません

さて出産の場面では韓国でも日本でも同じように

産みの苦しみに耐える女性達が

病院に集まってくる訳ですが、

韓国の場合、出産の際も韓国人の正直さが

如実に表れているように感じます。

韓国ドラマの一場面で女性が

「あんたのせいで～」

と悲鳴をあげながら、

夫の髪の毛を掴んで離さないシーンがあります。

それはまんざら嘘ではないのです。

私の出産の時もそういった妊婦が運ばれてきました。

私は歯をくいしばって陣痛の苦しみに

静かに耐えていましたが、

その途中にもまるでこの世の終わりかのように

叫びまくっている女性が運ばれていきました。

もちろん人にもよるでしょうが. . .

同じ苦しみを味わっている真っ最中の私が

その人を心配したのを覚えています。

戻り. . .

オッパの余りに無味無臭な感じの態度に

私は悲しくさえなっていました。

後で聞くと、オッパは確かに出産の時、

人が人を産むということに感動したと

言っていました。

次の日、さっそく日本から母がやってきました。

母は苦勞して元気な赤ちゃんを産んだ娘を

見て泣きました。

しかしほっと横を見ると、

愛する娘に対して何の反応も慰勞もない

義理の息子がいるではありませんか！！

母のイライラはまた爆発するのです。 . . .

## Vol.17

안녕하세요. 松本です。

それでは前回の続きをお話しさせていただきます。

韓国では出産で入院する場合、

特に問題が無ければ2泊3日で

退院する場合がほとんどです。

その代り、退院後サヌチヨリウオン

という施設へ行き、体を休める人が多いです。

私はサヌチヨリウオンには行かず、

10日ほど入院してから韓国の家に戻りました。

車の中では母、オッパ、私、赤ちゃんがいて、

私は赤ちゃんが元気に生まれて来てくれたことに

感謝しつつ幸せな気持ちでいっぱいでした。

車の窓から見える景色がなんとも色鮮やかなこと. . .

しかし. . .

その幸せは家に着くや否やこっぴみじんに



崩れ落ちてしまうのです。 . . .

家のドアを開けようと、

ドアに目をやると一枚の張り紙が貼られていたのです。

そこにはごみの処理を不正に行ったので

100万ウォンの罰金を払うようにという

張り紙が貼られていました。

私「は一あ??オッパ、これ何?」

意味が分からずただ驚いて産まれたばかりの

赤ちゃんを落としそうになりました。

頭の中は100万ウォン罰金の文字が

ぐるぐるぐるぐる. . .

オッパ「えっ?! 知らないよ. . . なんだこれは!!」

私「しっかり思い出してよ。何かしたんでしょ?」

そうしてオッパはやっと私の入院中に

ごみを出した時の事を思い出しました。

オッパは私の家の前に勝手に捨てて行った

心無い人の生ごみを「まったく!」と言いながら

自分のごみ袋と一緒に入れ、捨てたのです。

しかしその置き去りにされたごみは  
分別されていないごみだったので、  
ごみの処理を怠る人が多いその地域で  
どこぞの公的機関はまるで見せしめかのように  
私たちに100万ウォンの罰金を突き付けたのでした。

私は黙っていられませんでした！！

ごみを置き去りにされることで  
一番の被害を受けてきたのは私たち家族でした。

どうして私たちが100万ウォン払わないといけないの？！

しかも赤ちゃんを産んで帰ってきたその日に！！

目の色を変えた私を見て  
母は尋常じゃないことが起こったんだと思い、  
そっと赤ちゃんを抱いて家の中に入りました。

ただじっとしているオッパに私はイライラしながら、  
その公的機関に電話をし、来てもらいました。

立っているだけでもフラフラする状態で、  
私は今までどれだけごみの事で苦勞してきたかから始め、

外の壁に「勝手にごみを捨てないでください」

と書いた張り紙を作ったのは

私であることを主張し続けました。

そして何とか罰金を払わずに済んだのです。

その間、オッパといたら何言話したでしょうか。 . . .

このごみ事件をきっかけに

私のオッパに対する葛藤が本格的に始まるのでした。

## Vol.18

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話しします。

外国で子供を産み、

育てるということは本当に大変な事です。

出産後のこの時期. . .

私にとってこれほど苦しい期間になるとは

夢にも思っていませんでした。

そしてこの時をきっかけにオッパの人間性に対する

不信が本格的に始まるのです。

オッパの仕事は本当にきつく、

毎日、朝方帰ってきては朝方戻ってきました。

体力的にも精神的にもいっぱいいっぱい

なっていたと思います。

韓国ではこのように

体を壊しかねないほど働くのが一般的です。

仕事の休みといえは月に1度しかなく、

本当にオッパをみていてかわいそうでした。

なので出産し、帰宅してから1週間ほど母親が

私と子供の面倒をみてくれましたが、

帰ってからは私一人で子供の世話をしました。

何をどうしていいのかわからず、

私の体もきつい。

赤ちゃんは昼、夜関係なく

ずっと泣いてばかりで全く寝ません。

私は一人、パニックに陥っていました。

3ヶ月ほど寝れない日が続いた頃でしょうか. . . .

とうとう私自身がおかしくなると思い、

オッパに初めて訴えかけました。

私「オッパ、申し訳ないんだけど、  
今日だけ夜、赤ちゃんみてくれないかな？  
もう何か月も寝れてないんだよね. . .」

その後、オッパが発した言葉は  
私の心に今まで受けたことのない衝撃を与えました。

今でもはっきりと覚えています。

オッパ（笑顔で）「ふつう父親は赤ちゃんとは  
別の部屋でゆっくり寝るもんなんだよ。  
みんなそうしてる」

私は声を失いました。

もちろんオッパの仕事がきついことを  
十分に分かっていたので、  
それまで赤ちゃんの事でオッパに何かを  
頼んだことはありませんでした。

実際、出産してから半年ぐらいオッパは  
おむつがどこにあるかも知りませんでした。

「やれるところまで私がやる」

その一念で赤ちゃんを一人でみるのが  
私のオッパに対する思いやりの気持ちであり、

そのことをオッパは理解しているものだと  
ばかり思っていました。

今まで私に尽くしてくれたオッパ. . .

本当に私の目の前にいる人が  
あのオッパなのかと思っでは  
自然と涙が溢れてくるのでした. . .

## Vol.19

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話させていただきます。

オッパの心無い言葉に凍りつくような思いをし、  
それから以降も彼に対しての信頼が揺らぐ出来事が  
数えきれないほどありました。

一般的に出産以降赤ちゃんが2歳くらいになるまでの  
一番大変な時期に離婚率が急上すると言われてています。

出産後、まだまだ本調子になっていない女性が  
たった一人で子供をみるというのは  
本当に大変なことです。

多くの女性たちが私のような思いをしてきたんだなあ

としみじみ感じます。

私はオッパに対して自分を犠牲にし、

自分ができる精一杯してきたと自信を持って言えますが、

オッパはいつも自分の事だけ考えているようでした。

男性の脳では犠牲＝愛情とはならないようです。

私たちは喧嘩を繰り返しました。

本当にくたびれるほど喧嘩をし、

その後に残るのは「この人で良かったのか？」

という疑問だけでした。

そういう時、実家の母から連絡がありました。

母「体、大丈夫？赤ちゃんは？チュンスくん、

赤ちゃんみてくれてるん？

あんたに任せっ切りなんやろう?!」

凶星でした...

しかし外国に嫁に行った娘を心配する母に

「その通り」とは言えません。

私「何とかやってるよ...」

必死に涙をこらえて声を絞り出しました。

後で母から聞いたことですが、

この時昔からやると言ったらやり通す

強気な娘であるが故に母はより心配だったといいます。

母は思いつめたように電話を切りました。

そして突拍子もない行動に出るのです。

母は日本で会社を経営している知り合いと連絡をとりました。

義理の息子が日本で働きたがっている。

そこの会社に入れてくれないか。

勝手にそんな相談をし始めたのです。

母は全てをお膳立てした後、

オッパに「日本で働く気はないか？」と聞いたのです。

毎日死ぬほど仕事をし、

休みもほぼない韓国のビジネスの界。

のどかな田舎で育ってきたオッパが

そんな世界で生きるにはもう限界でした。

彼にとって義母の言葉はまさに彼の生きる希望となったのです。



## Vol.20

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話します。

「日本で働く気はないか？」

という義母の提案にオッパはとても驚きました。

それもその筈。

オッパは海外で暮らした経験もなく、

日本語も話せません。

しかしオッパにとってこれからの問題よりも

今、限界にきている状況からの脱出の方が大切でした。

オッパは3日も経たずに私にこう言いました。

「日本で暮らそう！」

私の答えはもちろん. . . NOです。

「オッパ、今言っている事がどういうことなのか

本当に分かってる？日本語も全くできない。

日本について何も知らない。

今のオッパが日本で働くには

余りにも準備が整ってなさすぎる」

そう言って私は自分の話をしました。

「10年間、私が苦勞してきたことはどうなるの？

今まで何のために日本語講師として

経歴を積んできたと思う？

人脈だってそう. . .

今、やっと苦勞してきた結果が出てきてる時なのに

何言ってるの?!」

私は博士に入ったら大学で

教えることが決まっていたのです。

そうならば大学教授になるには時間の問題でした。

自分の夢が叶うことは分かっていたのです。

私は心の底から怒りが込み上げてきました。

オッパは家族の人生がかかっていることを

余りにも簡単に決めてしまったのです。

私はオッパという人間に本当に失望しました。

いえ、軽蔑しました. . .

それでもオッパは私に頼み続けました。

オッパは私の顔を見る度「日本、日本」と言い続けました。

どんどん結論を出すべき日が近づきました。

私は何の魔が差したのか...

こう考えるようになりました。

今までオッパが自分にこれだけ何かを

頼んだことがあっただろうか。

旦那がこれだけ行きたがってるのに、

私が反対することが正しいことなのだろうか.....

私の周りでは日本に行った友人はみんな

約2年で韓国に帰って来ていました。

私は2年を目途に帰ってこればいい。

そう思うようになり、

最終的にオッパが私に言った

一言を信じて日本で住むことにしました。

オッパ「家族を大切にしたいから

日本に行きたいんだ。自分を信じろ！」

それからは引っ越しの準備に追われました。

私は仕事関係者からは猛反対を受け、  
大学院の仲間からは口を揃えて  
「理解できない」  
と言われました。

それでもオッパの一言を信じ、  
私の心は揺るぎませんでした。

もう日本に来て10年になります。

今、私はあの時の27歳の自分に  
会えるとしたらこう言うでしょう。

「嘘つき旦那を信じるな」と...

## Vol.21

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話ししたいと思います。

「家族を大切にしたいから日本に行きたいんだ。

俺を信じろ！」

わたしは10年間の下積みを白紙に戻す覚悟で

日本行きを決意しました。

しかしその為にはオッパのこの言葉に  
執着するしかなかったのです。

私は高校を卒業してからずっと海外生活。

手の届く所にある夢、友達、仕事を捨てました。

悔しかった...

私達は何の経済的な基盤もない中、  
家族3人、実家で私の両親、弟と  
暮らすことになりました。

オッパの職場には韓国人が3人ほどいました。

なのでオッパは意思の疎通はできました。

ただ問題は会社の社長は  
韓国人が嫌いだということでした。

私の母が余りにも一生懸命  
義理の息子を雇ってほしいと  
頼むので仕方なく許したのです。

歓迎されない立場でオッパは  
アルバイトから始めました。

会社に入ったオッパは一生懸命働きました。

一般的に韓国人は自分のプライドをかけて  
一生懸命働きます。

ただその分衝突も多いのです。

その社長は韓国人同士で  
とにかく喧嘩が絶えないという理由で  
韓国人が嫌いになったといます。

ただオッパはそこで働く韓国人とは違いました。

下の中から徹底して学び、  
そこでのスキルを自分のものにしていきました。

彼は開拓するのは苦手ですが、  
与えられた所ではいつもどこでも  
一生懸命な人です。

そしてオッパは社長から好かれるようになり、  
信頼され、仕事を任せられるようになりました。

いつしか彼は会社になくてもならない存在に  
なっていたのです。

オッパはこう言いました。

「日本に来て生まれて初めて

やり甲斐というものを知った」と。

わたしはこれで良かったんだと思いました。

オッパ個人的には...

日本での生活の最大の問題は私の親との同居です。

私の母は浪速の後光が出ているような人。

心で思ったと同時にそれが口に出てしまいます。

一方オッパは韓国人。

気は弱くても自尊心の持ちようだけは

誰にも負けません。

たとえ相手が義母であっても...

そして二人のバトルはいつも予告もなく始まり、

私は二人の板挟みになって

日本に来た事を心の底から後悔するのです...

## Vol.22

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回に引き続き、

「韓国生活談話」と題してお話します。

オッパにとって私の実家での暮らしは不思議であり、  
異常であり、別の星の話だったと思います。

オッパが考えるまともな家庭とは  
お父さんという絶対権利者の下で動いていくものです。

私の家はそれとは真逆。

父は母より家の事をこなし、  
お正月になると母と並んでおせち料理を作ります。

母も子もnoならnoと父にはっきり言う家です。

私の実家で同居してからオッパはいつも

「この家はおかしい...」

そうつぶやいていました。

ただ私の家も他とはスタイルは違ったとしても

親が子を、子が親を思う気持ちは

微塵も変わらないのです。

それ故、私は親と旦那の板挟みになりつつも

オッパの私の親に対する態度に怒りを

募らせていくのでした。

ある夕食の時の事...



父「チュンス君、食べたら皿ちょうだい」

父は早く食べ終わり、

そのまま台所に行って洗い物をし始めました。

オッパ「はっ、はい？あっ、えーっと...」

オッパは何が起こったのか訳が分からない様子でした。

父「はよ片付けてゆっくりしたらええから。はよ貸し」

そうして父は手早く洗い物を続けます。

そしてオッパはそのまま父にお皿を渡し、

自分は部屋に行ってパソコンを触ります。

問題は...こういった事が日常茶飯事に

繰り返されていった事です。

韓国は親を大事にする国。

それが韓国人の素敵なところだと思います。

義理の父が洗い物をしているのに

オッパの立場で自分はゆっくり休めるものなのか...

私は考えを募らせました。

私ならオッパの家で

例え同じ状況に置かれたとしても  
絶対に彼のようににはできません。

父が掃除をしてる時も洗濯物を干している時も  
オッパは父を手伝おうとはせず、  
いつも横でパソコンをしました。

私が出した結論はこうです...

オッパはうちの親をバカにしてる。

そして私はもう我慢が出来ず、  
オッパに突っかかていくのです。

彼はその度こう言いました。

「この家はおかしすぎる...」

今から思うとオッパにとって  
嫁の実家での生活は日本の生活と  
私の家のスタイルに慣れる為の  
修行期間だったのでしょう。

そして最も恐ろしい事は...

私だけでなく、  
母が父とオッパのやりとりを直視していた  
ということです。

拳を震わせ、怒りの炎をメラメラ

燃えあがらせながら...おお...こわっ。

## Vol.23

안녕하세요.松本です♪

それでは今日も前回の続きをお話したいと思います。

私の実家での生活は私にとっては

親がいてくれて子育てを手伝ってくれるので

とてもありがたくはありましたが、

同時に親と韓国人の夫の板挟みになり、

毎日心が疲れ果てていました。

親にとっては韓国人との生活は初めてのものであり、

文化の違いから理解しなければなりません。

しかしいくら私が日本と韓国の違いを

親に説明したとしても生活である以上

頭と心が付いて行かない様子でした。

この頃、子供は1歳になろうとしていましたから、

もう私は夫をオッパ(お兄ちゃん)ではなく、

アッパ(パパ)と呼んでいました。

私「アッパ、お父さんは家の事をみんなが  
少しでも楽できるようにやってくれているんだよ。  
娘の私でもお父さんが家の事をしてたら  
申し訳なくて一緒にするよ。  
アッパは横でお父さんが家事をしていても  
申し訳なくないの？」

アッパ「会社の人にこの家の状況を話したら、  
みんな普通じゃないっていう。  
お父さんが率先して家事をするなんて．．．  
やっぱりこの家がおかしいんだろ」

私がいくら話しても話は並行線です。

私は家族の形が問題じゃない、  
人を思いやる心が大事なんだと主張し、  
彼は私の家がおかしいと主張します。

しかし彼がどう思おうと私から言わせれば  
アッパ自らが日本での生活を決めたんです！

私の大学教授の夢を台無しにしてまで！！

しかもアッパは子育てを  
一緒にしようとはしませんでした。

男の仕事と女の仕事に分けて考えていて、  
子育ては女の仕事. . .

そう考えている彼は子供が1歳になるまで  
おむつ一つ変えたことはありませんでした。

私はそういった彼を見る度、  
日本行きを決定させた

「家族のために日本で暮らしたいんだ！」

そういった彼の言葉がいったい何だったのか  
分からなくなり、子供の事、親の事、そして  
私の夢を壊した張本人が彼であることに  
もう我慢できなくなっていました。

私はアッパの服をクローゼットから取り、  
それらを握りしめながら  
2階から落としてしまおうか、  
ごみの日に全部出してやろうか、  
はたまた風呂の水に全部つけてやろうか. . .

そして彼が大事にするパソコンの前に立っては  
彼が帰ってくるまでにバットで  
ぼこぼこにしてやろうかと  
毎日想像を膨らませるのでした. . .

今から考えればその時の私は  
普通ではありませんでした。

しかしもう全てが限界でした。

そしてとうとう私は彼の服を全て  
風呂の水に沈めてしまう日がやってくるのです。 . . .

## Vol.24

안녕하세요. 松本です♪

それでは今日も前回の続きをお話しします。

アッパ（以前のオッパ）は  
私の実家でも自分流に暮らしていました。

私はアッパの私の親への配慮のなさ、  
赤ちゃんは一切私に任せ切り、そして  
私の夢を奪った事に対してみじんも申し訳なさを  
感じていない事にもう彼を許す事が  
できなくなっていました。

しかしそんな中でも私は  
父の偉大さを再確認するのです。

父は義理の息子への不満の一切を飲み込み、

むしろ「いつもチャンスくんも大変やな～」と  
彼を労いました。

父が洗濯物を干している真横で  
パソコンをいじっている彼をです！！

父は娘が親と旦那の板挟みになって  
苦しんでいる事を誰よりも分かっていました。

一方母は義理の息子に対し、  
ある日、いきなり堪忍袋の尾が  
プツリ切れてしまうのです。

大雨の日、外出先から帰宅する車中の事です。

それはそれは怖いくらい雨が車を  
叩きつけていました。  
前が全く見えません。

小さい子供を乗せているので  
一刻も早く帰る必要がありました。

幸いにもその辺りは母が常にバイクで通る所で  
近道を知っていました。

母「チャンス君、次の信号で右折して。近道やから...」

そのすぐ後の事です。

彼はそこを右折せず、

しっかりとした顔つきで直進しました。

私は何が起こったのか分かりませんでした。

私「アッパ.....間違えたん？」

アッパ「いや」

母は韓国語は分からなくても

全て気配で分かる人。

私はその状況を取り繕う暇もありませんでした...

母「チュンス君、何で曲がらんかったん？」

母はアッパがわざと右折しなかったことを

知っていました。

母の顔つきはみるみる変わり、

激しい雨と共に緊張感だけが募っていきます。

そしてその状況をさらに悪化させたのは

アッパでした彼は母の問いに答えもしなかったのです。

「あんた、親を無視してんの？」

母は声を荒げました。



それでも彼は一切答えません。

私はこの状況をどう理解したらいいのか

全く分かりませんでした。

何とか家に着き、

まずは子供を着替えさせるため部屋に入りました。

しばらくして私はアッパに

どうしてそのような行動に出たかを尋ねました。

アッパ「だってあの道は細くてこんな

大きい車が通る道じゃない。

あんな雨のなかスリップでもしたらどうするんだ」

私「それならお母さんにそう言えばいいでしょ？」

アッパ「お母さんに言ったって分かってもらえない。

どうせ腹を立てられるだけだよ」

私「あなたが返事もしないことが

お母さんをより怒らせてるのが

どうして分からないの！」

私たちの会話はいつもこんな調子です。

アッパは『人はどうせ変わらない』

そう思っていました。

自分自身がそうだからです。

だから『問題が起きたら会話で解決する』

という方法は彼の頭の中には最初からありません。

彼の家では

『家族はお父さんの言うことに従う』

『女性は男性の言うことをきく』

そういうことで回っていたのです。

それでも私は分かっていました。

彼は情のある人。

私だけに限らず人のために

自分ができる精一杯をします。

だから結婚前、私は彼を神様のようにと

思っていたのです。

あの時、私が彼の人間性に魅力を感じたのは

事実でした。

ただアッパは自分の心が動いた時にしか

その人間性を発揮できないのです。

私は不器用な彼を理解しようとしてしました。

そうやって私は心の整理を行っている矢先. . . . .

母「チャンス君. . . ちょっと話、しようや!!!」

母が1階から彼を呼びました。

そうしてまた家の中に大きな嵐が吹き荒れるのでした。

## Vol.25

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回のお話の続きをさせていただきます。

母「チャンス君、話しよや!!!」

母は義理の息子が義母を無視したという事実

もうかんかんに怒っていました。

そうです. . .

人はけなされるよりも無視されるほうが

腹が立つということ。

私はアッパから学びました。

アッパは根っからの小心者。

それでも韓国人なのです！

アッパの中心には自尊心という柱が  
高々とそびえ立っていました。

彼は眉毛をぐっと上げ、  
さも気合いを入れましたと言わんばかりの顔で  
1階に下りて行きました。

母「なあ、チュンス君、あんたは私を、  
義理の母親を無視したよな？」

アッパ「. . . .」

母「今も無視するんか？！  
じゃあ、なんで右折してって言っても  
右折せえへんかったんか話してみ」

そんな問答が続きましたが、  
アッパは結局これといってまともに答えません。

母の怒りがこれまで一緒に暮らしながら  
募った不満と合わさって、それはもうmaxに  
なっていました。

今にもアッパにとびかかりそうです！！

そしてとうとうアッパが重い口を開きました。

私はほっとしました。

やっと謝る気になったのかと．．．．．

アッパ「お母さんが考えていらっしゃるように

自分は思っていない！

勝手に判断しないでください！」

『な—ぬう．．．．．』

私はこの人はあほかと思いました。

アッパは母の怒りの炎になみなみと

油を注いでいるのです！！

そしてとうとう收拾がつかなくなった時、

父という助け舟が来て

「チャンス君、もう2階に上がり。

これじゃあ話し合いにはならんやろう」

とアッパを2階にやるのです。

こういうことがちよくちよく起こりました。

私はアッパをフォローしたくても

フォローのしようがありませんでした。

なぜなら私自身が彼を理解できなかったからです。

でも私は知っていました。

多くの韓国人はたとえ自分が間違っ

たことを自覚していたとしても自尊心が先なのです。

相手が自尊心を傷つけるようなことを

言うことは何がどうあっても許せません。

だからこのときのアッパの気持ちは

「いくら自分がお義母さんの気持ちを

害するような事をしたとしても

そこまで自分を侮辱するお母さんの方がおかしい」

なのです。

私は改めて国際家庭の難しさをかみしめるのでした。

## Vol.26

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話します。

私の親との同居は親にとって、

アッパにとって又、私にとっても

とても疲れるものでした。

もちろん笑って過ごす日々もありましたが、

前触れなく起こる嵐に気の休まる暇がありません。

そんな中、私は『こんな筈じゃなかった...』

という後悔と、夫に対する怒りのやり場のなさに

日々、悶々としていました。

そして何よりも自分自身が大学院を

卒業していない中途半端な立場にいることに

うんざりしていたのです。

仕事も家の事も全部しましたが、

私の心はいつもこう言うのです。

「私は中途半端なんだ...」

そして母に相談しました。

母はいつもパワー溢れる大阪人。

母「何を悩むこと、あんの？私らがおるのに...」

後で後悔したらあかん。行っといで！！」

私「どこに？」

母「韓国やん！！」

私「はあ～？？子供は？まだ保育所も行ってないのに？」

アッパは？私がおらんと...」

母「大丈夫や！任せとき！！！」

そう言って母は着々と私が韓国で暮らせるように準備をするのです。

そうして本当に私は約1年間、卒論を書くため韓国に単身行って暮らすことになるのです。

子どもはまだ2歳、歩いてもいませんでした。

行くと決めてからも自然と涙が止まりませんでした。

そう、私はオンマなのです。

自分の勝手に子どもが犠牲になるのは何があってもあってはいけません。

でもその時の私はこれからの人生、家族みんなで幸せに生きていくために行く必要がありました。

私はアッパの休息所としてアパートを一つ賃りました。

そして家族に子供を預けて韓国に行きました。



今までの人生の中で最もつらい旅行になったのです。

## Vol.27

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話させていただきます。

私の夢は韓国の大学で日本語を教える事。

現実は大阪のおばちゃん...

私は否定したくても否定できない

この現実を一旦認めた上で、

それでも一つやりきったと自分自身、

納得したかったのです。

そうでなければこれから私は

日本で生きていけないと思いました。

それで2歳の我が子を家族に任せ、

一人韓国に旅立ったのです。

もう、戻れない...やるしかない！！

私の担当教授はその学校で一番厳しく、

研究しか知らない先生でした。

だから形式だけ整ったものは卒業論文として

絶対に認めてはくれません。

私「先生、卒論書きに日本から来ました」

先生「うそだろ？松本さん、本当に来たの？」

私「えっ？先生に連絡させていただきましたよね？」

先生「冗談かと思ったよ。

今からでも帰った方がいいと思うよ。」

韓国に着いて意気込む私に

こんな言葉が待っていました...

後で知った事ですが、

その先生は生徒に卒論を書いてもいいというまで

書かせない方だったのです。

卒論を書くまで何年もかかる人もいたようです。

何の準備も整ってない私は

途中で諦めて日本に帰るだろうと

先生は思っていました。

実際、卒論として認められるまでには

越えなければいけない大きな壁が

幾つもありました。

私は食べる間、寝る間を惜しんで  
論文の枠組みを作りました。

辛くて心が折れそうな時だけ  
子供の写真を見ました。

そうやって迎えた最初の発表会...

私は生まれて初めて大勢の人から  
総攻撃を受けたのです

『無能』という2文字がもう二度と立てなくなるほど  
私を押しつぶしました。

その日の帰り道...

どこをどうやって帰ったのかも覚えていません。

人の目も気にもしないで

道端でオンオン泣きながら帰りました。

私はただ息子に申し訳ありませんでした...

ここで終わる為にあの子を置いて来たんじゃない！

まだ始まってもないじゃないか！！

私は学舎に戻るや否や部屋にこもり、  
論文に食らいつきました。

住んでいた学舎の仲間は私より

10歳以上年下でしたが、

私をまるで本当の姉のように接してくれました。

彼らの助けを借りながら

私は着々と準備を進めました。

中間発表、最終発表。

そこで3人の教授から承認を頂かないと

卒業はできません。

担当教授はその度しぶとく粘る私を

少しずつ応援して下さるようになりました。

そして大きな発表の前の小さな発表会をこなす度、

私の発表を聞く人達の反応が

明らかに変わっていきました。

ついに最終発表の日...

とてつもなく大きい会場には

溢れんばかりの人、

そして前列には錚々たる教授陣が

座っていらっしゃいます。

私はその人達に自分が約1年かけて

完成させた論文を発表しました。

そして質問事項もクリアし、

私は長い長い洞窟を抜ける瞬間を味わうのです。

そう、全てが終わりました...

すぐに日本の家に電話しました。

息子の声を聞いた瞬間...

今までこらえてきた1年分の涙が一気に溢れだしました。

そして初めてゆっくり息子の写真を

見ることができたのです。

日本に帰る前、

何の準備もしないまま来た私を

最後までサポートして下さった教授に

ご挨拶にいきました。

先生はこうおっしゃいました。

「発表会がある度、

今度は諦めるだろうと思ってわざと

発表会に出るように言ったんだ。

でも松本さん、あんたはほんとしぶといね...

このままじゃもったいないから日本で博士を終えなさい」

他の先生方も一緒にいた学生には目もくれず、  
私にこれからの進路について質問を浴びせました。

私は評価されたのです...

息子と家族が私の唯一の原動力となって  
1つの成果を残しました。

こうして私は韓国の空港まで迎えに来てくれた  
家族と再会しました。

日本に戻り、  
私はまた大阪のおばちゃんに戻りました...

家族の存在に感謝し、  
死ぬ気でやれば何でもできるという  
自信を持った大阪のおばちゃんにです！

## Vol.28

안녕하세요. 松本です♪

それでは今回も前回の続きをお話したいと思います。

日本に戻った私はまた私の両親、弟と私の家族が  
一つ屋根の下で暮らしました。

その頃になるとアッパも義理の父、  
母に気を使うことを知り、  
父が家の事をしていると少しずつ  
手伝うようになっていました。

私たち夫婦は国際家庭で  
しかも私の親、兄弟と同居という  
何ともアッパにとってもまた私の両親にとっても  
過酷な状況ではありましたが、  
時間がお互いの隔りを埋めてくれました。

家族みんなで笑って過ごす日が増えてきたのです。

そんな時、弟が結婚することになりました。

アッパにとっていちばん理解できない義理の弟...

アッパからすれば自分の親に対して  
まるで友達のように接する弟は  
問題児でしかなかったのです。

しかしその義理の背後には息子を溺愛する  
義母の姿があり、アッパは義理に何か言おうものなら  
また大変なことになることを分かっていたので  
いつも言いたいことをぐっと我慢していました。

ある日、こんな事がありました。

いつものように父や母に言いたいことを言う

弟に対してアッパは

とうとう我慢できなくなりました。

そして義母の前であろうと

もう関係なくなってしまったのです！

また彼の眉毛がぐっと上がり、

弟に対して戦闘態勢に入りました。

(私) やばい . . .

アッパ 「さっきから聞いてたら、

自分が言ってることおかしいと思わないのか？」

空気が一瞬で凍り付きました。

弟「. . . . .」

アッパ「何が問題か分からないなら、もういい！」

そう言ってアッパはその場を去ろうとしました。

すると登場！！

もちろん母です！！！！

母「言いたい事、あるなら最後まで言いや。チュンス君！！」



完全に怒っていました。

愛する息子に対して中途半端に言い放つ

義理の息子に今度は母が戦闘態勢に入ります。

そして例のごとく父が登場！

「まあ、まあ、チャンス君、二階に上がり」

そう、見えない戦いの始まりです。

アッパと弟の関係性により母の怒りを

誘発させるという新しい展開を引き起こしてしまうのです。

## Vol.29

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話しします。

弟は親に対してまるで友達に対するように

接していましたし、その雰囲気の中で

韓国人のアッパはいつもカルチャーショックを

受けていました。

しかしアッパにとってそれは日本の文化として

捉えるのではなく、弟自身の人間性の問題であると  
思っていましたから、義弟に対していつも  
理解できずいららしていました。

しかし日本で数年生きてきたアッパは  
目下の人間に不満をぶつけることより、

その弟の背後にいる義母の怒りを  
買わないようにすることの方が  
大事であることは分かっていたので、  
義弟に対する不満をぐっと我慢し続けました。

また弟はもちろん義理の兄との喧嘩を  
避けていましたので、  
アッパと義弟との関係が悪くなることは  
ありませんでした。

そんな時、弟が結婚することになりました。

あれやあれやと言う間に結婚式を終え、  
またしばらくして子供を授かりました。

新しい家族が増えたのです。

その頃私たちは実家を出て、  
別居をしていましたので  
弟家族は実家で同居することになりました。

あの恐ろしい記憶がよみがえります。

そう、今度は日本人同士の嫁姑問題が  
起こりそうな気配が漂っていました。 . . .

私たち家族といえば. . .

そんなこわーい雰囲気を出したマンションから  
気楽に眺めているのです。

## Vol.30

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話しします。

私達家族は実家から車で約1時間の  
ところに引っ越ししました。

ちょうど良い距離です。

両親は1週間に1度は孫に会いに来ましたし、  
母の職場が新居から近い事から  
アッパのいない夕方頃によくうちに来ました。

記念日は一緒にお祝いし、外食もよくしました。

とても良い関係を維持できるようになったのですが、

しかし...一つ大きな問題がありました。

私は姑 VS 嫁の間でまた

中を取り持つ役割を担うようになったのです.....

もう勝手にやってくれー

私は心の底からそう思いました。

その戦いは大阪人姑 VS 新潟人嫁。

例えると動と静。

太陽と月。

たこ焼きと米。

しかしうちの嫁には雪国でしくしくと

耐え忍んで生きてきた秘めた強さがあり、

心にある事をすぐに口に出す大阪人とは

180度違うのです。

注) 皆がそういうわけではありません

そして嫁はこういうのです。

「大阪の人って韓国の人と似てますよね...」

えっ、ここでも韓 VS 日??

そしてここで不思議な事が起こりました。

私達が実家から離れて暮らすようになって以降、

アッパは義母をより理解するようになったのです。

そしてこの嫁姑間の言葉無き戦いをもって

アッパは義母の味方につくのです。

母はまたそんな義理の息子が良いように思えるのです。

なんじゃそりゃ??

チャンチャン!

## Vol.31

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話しします。

韓国では雨に特別な思いを持つ人達が多いんです。

雨が降る日、私の友人があちらこちらで

窓の外を眺めながら彼氏に想いを馳せていました。

また一般的にプッチンゲやトッポギが

食べたくなるともいいます。

不思議ですね～

それでは本題に入り、前回のお話の続きをさせていただきます。

別居した私たちは親と良い距離感を保ちながら  
幸せに暮らしていました。

そんな時、両親と同居している弟から  
突然連絡がありました。

新婚で幸せいっぱいである筈の弟は  
悲壮な声でこう言いました。

「嫁が病気で大変な状態なんや．．．」

その頃、義妹は妊娠が分かったばかりで  
大病にかかってしまい、  
妊婦でありながらも闘病生活を  
強いられてしまったのです。

私にとって弟は問題だらけの親不孝者でしたが、  
たった一人の自分の分身のような存在です。

このことにより家族が一瞬でボロボロになりました。

私の両親、弟、義妹は毎日病院という病院を巡りました。

治療方法、費用の工面など問題は山積みでした。

そして何よりも義妹が妊婦であるということで

お腹の中の赤ちゃんを守らなければなりませんでした。

そんな時、私が2番目の子を妊娠しているのが分かりました。

私は家族にも何も言うことができません．．．

公園で一人、ただ泣くことしかできませんでした。

アッパはそんな私の姿を

遠くで見守っているようでした。

アッパはしばらくしてこう言いました。

「でもお義父さん、お義母さんに言わないと。

良いことなんだから．．．」

この言葉で私は両親に重い口を開くことになります。

私は妊婦になりましたが、

毎日悲しみと不安と絶望感いっぱいでおすごすのでした。

## Vol.32

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話しします。

私の両親、私の家族、そして弟家族は  
弟の嫁の大病で家族が心を一つにせざるを  
得ない状況に陥りました。

そんな大変な時に  
私たち夫婦はまた子宝に恵まれました。

素直に喜べない中、  
私は長いつわりの時期を超えていきました。

また義理の妹も無事に出産し、  
生まれたばかりの愛娘の為  
辛い治療にも耐え抜きました。

そんな家族の危機は  
両親のサポートなしでは決して超える事ができず、  
そんな中でも嫁姑問題はちらほら顔を覗かせましたが、  
最終的には全て丸く収まるのでした。

私たちはというと...親と別居し、  
新しい家族を迎えて切磋琢磨する毎が続きます。

一人目の時の生活と違うのは...アッパです。

そう、  
私がそれまで2人の子の親になるのを恐れたのは  
彼が子育てに全く関与しようとしなかったから...



その恨みは私の心の奥に根付く残っていました。

それで私は計画的に2番目の妊娠が分かった瞬間から  
アッパの耳元でこの言葉を呪文のように唱えるのです。

「長男と時みたいにうちに赤ちゃん  
任せっきりにしたら、今度こそは許さんよ^^」

私たちは日本で長年住んできた国際家庭です。

いつまでも韓国の田舎の男性らしく  
無条件男性（上）、女性（下）という考えを  
基本に置き、女性は家事、子育ての全てをする  
と思いこんでいられては溜まったものじゃありません！

日本で生きることを選んだのはアッパなのですから！！

【注】韓国の田舎の男性が全てそうではありません。

この呪文を事ある毎に聞かされたアッパは

男のプライド故

「分かったってばー！！」

と強く出ましたが、

私の目の奥の殺気に気づいていた小心者の彼は

覚悟を決めざるを得なかったのだと思います。

次男の子育てはアッパがオムツを替え、

あやし、抱っこし、ミルクを作り、  
子供をお風呂に入れ、洗い物、洗濯物干しと  
今までやったことのない家事を自分から  
こなしていきました。

まるで別人です。

毎日毎日の家事に彼は不満を漏らしました。

3日に1度は発狂もしました。

しかし私は『子供の風呂』、『洗い物』、  
『洗濯物干し』のこの3つをこれからも  
アッパの仕事として彼に認識させる為に  
心を鬼にして皿1枚足りとも手を出しませんでした。

『やると言ったら必ずやる！』

もとい

『やらないと言ったら死んでもやらない』

この私の徹底ぶりにアッパは折れるしか  
ありませんでした...

私も心が何度折れかけたでしょうか...

この葛藤は何年も続きましたが、

今ではすっかりアッパの仕事になりました。

私の勝利です！マンセー！！

## Vol.33

안녕하세요. 松本です♪

それでは前回の続きをお話したいと思います。

私は子育てに奮闘する毎日が続き、

アッパは精一杯家事を手伝いました。

ただ彼の最大の弱点は「眠気」です。

一旦眠くなると、電池が切れたロボットのように

動作が停止してしまいます。

それが何時であろうと、

どこであろうとその場で眠りこけるのです。

私も毎日寝不足な中、

心を奮い立てて

『やらなければいけないこと』

をこなしている傍でいきなりその辺で寝られ、

またそれが9時とかであると...

私の怒りは最高点に達するのです。

彼は疲れていました。

そして私もまた疲れていました。

それで私たちは心の余裕もなく、  
相手にイライラする日々が続きます。

たくさん喧嘩もしましたが、  
今過ぎてみるとそういう時期だから  
仕方なかったように思います。

ただこのアッパの『眠気』は  
今現在も続いており、  
これがややこしいのは  
『八つ当たり』を引き起こすことなのです。

この眠気に占領されたアッパは  
人が変わったかのようにいらいらをぶちまけます。

それはまるで酒乱のようでした. . .

ちなみにアッパは一滴も飲みません。

先日はいつものように洗濯物を干そうとする  
アッパは洗濯機に手を突っ込んだまま眠っていました。

アイゴ！

そして私がそんなアッパを起こすと、

いつものように. . .

「どんなに疲れていると思ってんだあ〜！」

といらいら、いらいら。

私も一時はそんなアッパに

喧嘩モードで接してきましたが、

もう言っても仕方がないことを悟り、

それから

『やることさえやって寝てくれたらいい』

と思うようになりました。

私「そんなに疲れているならやることやって早く寝れば？」

アッパ「うん、今日は早く寝ないと. . .」

そんな会話をし、彼は洗濯物を干し終えます。

そして朝の2時頃. . .

暗がりです布団をかぶり、

顔を発光させている彼を発見するのです。

「アッパ？」

私が布団をそっと剥ぐと. . .

彼は携帯で長〜く続く韓国ドラマを

見ているではありませんか！！

それでいつも眠いんかあい？！！！！

私の怒りのバロメーターは

とうとう故障しそうになるのです。

## Vol.34

안녕하세요. 松本です♪

韓国生活談話も34回になりました。

これまで皆さんが温かく応援してくださったおかげで

韓国生活談話もこんなに長く続くことになりました。

感謝、感謝です。

私たちは韓国で大学生の時に知り合い、

国、環境、性格、価値観など、違いだらけの中、

最終的に結婚に至りました。

お互い生まれて初めて付き合った者同士、

結婚することになります。

私は今でも人からよく聞かれることがあります。

「どうして韓国の人と結婚することになったの？」

その度、私はその質問に対する答えを振り返って  
考えてみるのです。

私たちは何もかも違いましたし、  
当時、彼には何もありませんでした。

だから若い私はオッパという人間を  
みるしかありませんでした。

私の目に映ったオッパは  
無口で静かで非社交的でしたが、  
私にだけでなく、他人のために  
自分ができる精一杯をする人でした。

そして私はいつしか  
「オッパが笑っている顔を見たい」  
と思うようになりました。

だから結婚したのかもしれません。

今では結婚して10年を過ぎました。

その間、韓国と日本で暮らしました。

私の親との同居、出産、育児、家族の大病、  
親との別居と様々な場面で彼と共に生きてきました。

彼への呼び名もオッパからアッパに変わりました。

彼ゆえに笑い、喜び、幸せを感じましたが、

同時に彼ゆえに泣き、傷つき、

不幸せを感じたりもしました。

でも今でも変わらないことは

「アッパの笑っている顔が見たい」

ということです。

毎日アッパにいらいらしている私ですが、

この思いだけはきっとこれからも

変わらないだろうと思います。

あれから家族もまた一人増え、

子供も3人になりましたが、

韓国人のアッパと日本人のオンマの

良いところをしっかりとみて育てあって

もらえたらと思っています。

これまで長い間、私の体験記に

付き合ってくれた皆さん、

本当にありがとうございました。

これで最終話させていただきたいと思います。



写真は13年程前のオッパと私の写真です。



ミレで生徒さんにお会いしても写真の中の私はいません(^\_^;)

これからも皆さんの韓国語学習を応援させていただきます♪